

## 患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(カイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第39回 「がん」どころではないということ

2004年膀胱がんに2個も摘出するとは思ひなり、地元で左腎臓を摘出し、その1ヵ月後、大阪で膀胱まで摘出するに初めてだったからだ。大いたった。まさか臓器を阪での手術日の数日前、

## 治す医療と支える医療の違い

インフォームド・コンセントが有り、術式が3種類あり、その中から選ぶように指示された。当然一番良い術式を医師も私も選ぶつもりでいたが、それは叶わなかった。せっかく大都市大阪まで出向いたのに何故。最高の手術をして帰ってきて、自分の住む町益田市ではアフターフォローが出来ないという。医療格差のツケが患者の自分に来るとは。

やや病状が落ち着いてきた矢先、2010年糖尿病が発覚して、検査入院を2度体験して現在、治療中ながらインシュリンを日に4回(98単位)打っている。これは忙しい。家にじっとしていないから打つのを忘れたり、打つタイミングを逃したり、これは大変。命がかかっているのは承知しているが、なかなか全とはいかない。数値もだんだん悪くなって来ており、さらに悪くなればその先には透析が待っている危険な状態だ。

2014年大分で開催の「一死の臨床研究会」に参加し帰宅後、急に背中が痛くなり、呼吸困難となり益田赤十字病院に緊急入院。心筋梗塞と診断され、即手術を受け2日間生死をさまよった。ス TENTを2本入れたことが生に繋がった。翌2015年富山での講演を終え、帰宅後またも心臓の変調を来し、2度目の緊急入院をすることになったのは情けない。

2度目の入院で心筋梗塞を患ってから考え方が変わって来た。緊急度に応じた対応を考えるようになったからだ。がんは死に直結してはいない。ある程度時間の余裕を感じられる病気なのだ。一方心筋梗塞は即、死に繋がっているのが危険極まりない。心筋梗塞、低血糖の症状が出れば即、救急車を呼んでほしい。治す医療が必要だから。がんが悪化したなら痛みをとる医療が必要なので在宅で過ごしたい。がんは私に對して治そうとはしていないからだ。病状により対応を変えてほしい。それが私の希望である。